国立能楽堂３月特別企画公演『袴裂』奥津健太郎（右）野村又三郎（中）奥津健一郎（左）　写真提供:国立能楽堂

［能・狂言］

「古さ」の中に見いだす「新しさ」

小田 幸子

復曲という新しさ

古典劇である能は、伝統や伝承を重視する一方、常に「新しさ」を探ってきた。そのひとつが「復曲」である。レパートリーから外されるなどして上演が途絶えていた作品（廃曲・番外曲）を再び上演する復曲は江戸時代にもなされたが、狭義には1950年代以降復曲した能を「復曲能」と言い慣わしており、その総数は2005年末までに85曲に及ぶ（筑摩書房『能楽大事典』）。復曲の方法は通常、古台本をもとに古演出を参照しながら、新たに節付・型付を施していく。重要なのは、第一に取りあげた作品が歴史的意義を持ち、なおかつ現代にも魅力的であること、第二に演出・演技に新しい要素を導入することの二点である。古さと新しさの混在、あるいは古さと新しさという相反するベクトルが働いているのが復曲の特異性といえよう。近年、復曲の本数や手がける団体が増加するとともに、その方法も多様

化してきた。特に1985年頃から盛んになった「古演出上演」（仮称。廃絶した過去の演出を再上演すること。現行曲でもなされる）は古さの中に新しさを探る点で親和性を持つため、復曲と結び付く傾向がある。以下、2022年の復曲を取りあげて、「復曲の現在」を概観したい（曲名・上演日・上演場所・主催者・コメントの順に記す。）

賀茂物狂（かもものぐるい）　7月28・30日国立能楽堂《月間特集・狂乱の系譜》特別企画公演「能を再発見する」。

1983年の開場以来、新作・復曲・古演出上演を手がけてきた国立能楽堂による本年最大のイベント。特筆すべきは観客への徹底した周知である。豪華なチラシ、監修者・天野文雄による上演前の解説のほか、パンフレットは現代語訳付上演台本、解説と論考、シテ・観世清和らの寄稿、西村楠亭（なんてい）筆『葵祭図屏風』の掲載と盛りだくさん。7月4日には実演を伴った特別公開講座も開催された。情報発信やラーニングプログラムは他の復曲においても常態化し、「初演」という弱点を補っている。舞台はシテの意気込みと情熱にあふれ、特に舞を中心に新機軸が展開した。やや過剰な扮装と演技には賛否両論があろうが、復曲が類型的演技原則に縛られない自由な創造を生む場となったのは確かである。実は、〈賀茂物狂〉は廃曲ではなく、宝生・金剛・喜多の現行曲である。観世流による今回の上演は、ほぼ廃絶状態だった前場を復活し、上演台本は金春流系統の謡本に依拠しつつ、観世流に「蘭曲」として伝存する謡を取り入れた折衷本だった。本公演における台本作成と新演出のありかたは、従来の「復曲」概念に収まりきらない性格を持つ。

国立能楽堂7月特別企画公演『賀茂物狂』観世清和　写真提供:国立能楽堂

花軍（はないくさ）　10月5日　豊田市能楽堂　能楽協会・豊田市文化振興財団

能楽協会が展開している「日本全国能楽キャラバン！」の一環。室町期最後の能作者である観世長俊（1488?～1541?）原作で、草花の精が二手に分かれて優劣を争うという、

日本全国 能楽キャラバン！in豊田『花軍』　©原田眞二

室町物語の異類合戦物に通じる風流能。金剛流では復曲三回目（これとは別に2000年に『大倉流祖先祭能』で復曲初演）となる今回の舞台は、色とりどりの花を立物にした4名の子方（花の精）が花の枝で打ち合い、老翁姿の白菊の精（後シテ・金剛永謹）が藁屋から出現して仲裁に入り舞う。小品ながら、歴史的意義と魅力を備える。原作以来のものらしい〈菓争〉を間狂言に採用したのも良かった。台本は最古本の『観世元頼本』と江戸期改訂版の折衷、演出は改訂版に従う。このように、必ずしも原作を第一義とせず、舞台を生かす方法を探って復曲・再演し、その都度改訂を重ねるのが、最近の傾向である。金剛永謹は2019年に〈薄〉を復曲し（9月23日、国立能楽堂企画公演で改訂再演）、復曲に意欲的である。

不逢森　11月12日　名古屋能楽堂　復曲能を観る会（名古屋能楽振興協会共催）

シテ方観世流の加藤眞悟・長谷川晴彦・小室知也と狂言方和泉流の奥津健太郎が2021年に立ち上げた団体で、代表の加藤は〈和田酒盛〉など曽我物の復曲を手がけてきた。〈不逢森〉は康正二年（1456）以前成立の古作で、金春禅竹（1405～1470頃）作の可能性が指摘されている。死者の霊を呼び戻すとされる「反魂香」を焚いて、父親が亡き娘の姿を見るという内容。同宿した父娘が互いに気づかない、舞台上で娘が亡くなり遺体を葬る、娘が煙のうちに現れるなど新奇な展開が特色で、この種の能が夢幻能と並行していた事実に目を開かせられる。資料が少なく、演出と型は創案に近い。役者の動線にさらなる工夫が必要だろう。研究者の伊海孝充作成による貞享三年（1686）刊『三百番本』に依拠。

復曲能を観る会『不逢森』女(娘):加藤眞悟 僧:古室知也 商人(父):安田登　撮影:新宮夕海

狂言〈袴裂(はかまさき)〉　3月25日·26日　国立能楽堂　特別企画公演「能·狂言を再発見する」

2020年3月に予定していた延期公演。狂言の最古本『天正狂言本』に記載する筋立てと、江戸期絵画資料を結び付け、新たに台本を作成·演出する(台本·演出·シテ野村又三郎)。一つの袴を二人が共有するドタバタを描く人気曲〈二人袴〉が袴を真っ二つに裂くのに対して、〈袴裂〉は袴の片側だけ裂いて広げ、つながった二人分の袴のように見せる。復曲·復元とはいえ創作面が強いが、現行曲〈二人袴〉を相対化する意義があった。

以上、原作尊重から出発した復曲は、新しい演出や演技を生み出し、さらに創作の方向へとベクトルが進んでいる。古台本は必ずしも最重要では無くなった。部分的改訂は以前からみられたが、全面的に創作した狂言〈袴裂〉も行われた。能の例としては、2021年上演の〈綱〉がはじめてかもしれない(本年12月9日改訂再演)。「復元創作能」と題し、室町後期の演出記事を手がかりに、後代の長唄や歌舞伎を参照して、研究者の西野春雄があらたに台本を作成した。能狂言の古記録をステップボードとして創作に生かす公演は今後も増え続けるだろう。必要なのは、何を目的に行うのか意図を明確にし、復曲経緯の記録を残すこと、そして活発な批評である。全体を統括するドラマトゥルクの仕事もますます重要となろう。

大槻文藏の底力

高い品格と安定した芸で近年の能を牽引しているのが、大阪の大槻能楽堂を拠点に幅広い活動を展開している大槻文藏(シテ方観世流。1942年生まれ)である。1980年代から復曲·古演出上演にも積極的に取り組んできた。本年は番数も多く、〈江口〉〈求塚〉

横浜能楽堂『三老女』第2回『檜垣 蘭拍子』
大槻文藏 撮影:尾形美砂子　提供:横浜能楽堂

〈定家〉など大曲・難曲の上演が相次いだが、伝統と革新の両方に軸足を置く大槻の底力を実感させられたのが〈檜垣　蘭拍子〉（5月7日）だった。『三老女』と題して、能の最奥とされる〈姨捨〉〈檜垣〉〈関寺小町〉を三人の名手が4月～6月に月替わりで演じる横浜能楽堂企画公演のひとつである。かつて美貌を誇った白拍子・檜垣の老女の霊が、熱鉄の桶で水を汲み続ける〈檜垣〉は、多くの習イ事（特別な秘伝）を持つ難曲だが、今回は古演出として伝わる「蘭拍子」（白拍子舞の足遣い）を〔序ノ舞〕に組み入れる。大槻の演技は、「老女」らしさや地獄の苦しみをことさら強調することなく淡々と演じ、劇的表現は地謡（地頭・梅若桜雪）に託す。強烈なインパクトを与えたのは、舞の途中（二段オロシ）で、藁屋の作り物の手前、左の柱に寄りかかり、斜め上方を長い間見上げていた「休息」のシーンである。空を仰ぐような面の角度も、柱にグッと体を押しつけたまま立ち尽くす姿も極めて異例でありながら、長い人生に思いを馳せるシテの孤独がリアルに伝わってきた。大槻はこの箇所を〈檜垣〉の勘どころに定め、誰も試みたことのない大胆な仕方で表現したのではないだろうか。総じて大槻の舞台は、面装束の取り合わせから所作の細部に到るまで緻密でスタイリッシュであり、熱い心情や強い劇性は、ややもすればその裏に隠れてしまうというのが筆者の従来の印象だったが、〈檜垣〉は、大槻の思い描く「美」と「劇性」が共鳴した極上の舞台だった。

未来を担う能役者たち

第44回観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞し、最も勢いのある役者として観客の熱い視線を集めているのが、京都を中心に活動し、「テアトル・ノウ」を主催する味方玄（シテ方観世流。1966年生まれ）である。第44回テアトル・ノウ東京公演（7月2日、国立能楽堂）では、2020年の延期公演〈道成寺〉を「無躙之崩」の小書で演じて気を吐いた。味方の舞台は人物造型と表現意図が明確で、曖昧さが少ない。言葉と型が完璧にシテの内面表現として感じられるため、現代のセリフ劇を見るようなのだ。身体演技がスリリングな劇を構成する〈道成寺〉にも持ち味は存分に生かされていた。タップリ間をとった粘り気の

濃い〔乱拍子〕のあと、〔急ノ舞〕はこれ以上無いほどの超スピードで責め、後場の〔イノリ〕では肩関節からガクッと崩れ落ちる柱巻きに強烈な無念がこもる。少ないシテ謡も、高低、強弱、間あいを駆使して内面表現に活用する。能を知らなくても興奮するに違いない味方の舞台は面白すぎるかもしれない。だが、必ずさらなる展開があるはずだ。

鉄仙会（てっせんかい）に所属する鵜澤光（シテ方観世流。1979年生まれ）は、初挑戦の〈野宮（ののみや）〉において、永遠に満たされない主人公の魂を、若くみずみずしい情感を湛えて描いた（9月2日、渋谷能第二夜）。ひとつひとつの型が丁寧なのが鵜澤の持ち味である。面の扱いが際立ち、小柴垣や鳥居を見つめる姿が心深い。〔序ノ舞〕から〔破ノ舞〕への流れを、悲しみが昂じた果ての狂乱として捉えた点に個性が発揮された。会場の渋谷セルリアンタワー能楽堂は二百席ほどの空間で、かすかな面の扱いなど微細な表現が役者の息づかいを伴って伝わってくる。能とは、本来このような親密な空間に適合する劇なのかもしれない。能の将来を担う味方と鵜澤、対照的な作品と演奏が共存するのが能の懐の深さである。

●「萬狂言」主催の『祖先祭　初世野村万蔵生誕三〇〇年』（10月16日、国立能楽堂）が第77回文化庁芸術

テアトル・ノウ東京公演『道成寺 無躅之崩』味方玄
撮影:前島吉裕

渋谷能第二夜『野宮』鵜澤光 撮影:石田裕

祭大賞を受賞した。多彩なゲストと演目を取り揃えた舞台は、新工夫をふんだんに盛り込んでいるのが特色で、当代の九世万蔵新演出による狂言風流「千々尉風流萬之式」は、万蔵家由来の酒をテーマとした遊び心一杯の新作。〈見物左衛門〉を演じた萬（1930年生まれ）の強靱な声にはいつもながら度肝を抜かれた。病から回復した万蔵は昨年12月23日の誕生日に「万蔵の会」を発足した。気負いを捨てた清々しさが喜ばしく、持ち前の温か味を発揮した。毎年同日に開催予定とのことで、本年は第二回目を開催した。

『祖先祭　初世野村万蔵生誕三〇〇年』より 狂言風流『千々尉風流萬之式』　撮影：あかさか くみ

●『能楽タイムズ』の休刊

能楽界の情報紙月刊『能楽タイムズ』が2023年2月号をもって休刊する。能楽関係図書の出版社「能楽書林」（1907年、丸岡桂創立）の発行になる同紙は、1952年3月の創刊以来70年にわたり流儀を越えた能・狂言のニュース、公演情報、舞台批評等を掲載してきた。第二次大戦後の能楽史を跡づける第一級資料でもある。採算を度外視した歴代社主の使命感には頭が下がる。コロナ禍に謡本の売れ行きの悪さなどが重なったためというが、休刊を惜しむ声が跡を絶たない。

●コロナ禍の能楽界を記述する

コロナ感染症が及ぼした波紋や影響を記録する動きが顕著である。2020年3月段階から公演中止・延期情報をはじめ、能楽界のさまざまな対応、オンラインによる発信情報などをリアルタイムで伝えてきたのが『能楽タイムズ』である。東京文化財研究所無形文化遺産部は「新型コロナウィルスと無形文化遺産」をホームページに立ち上げ、「伝統芸能の演奏者と関係者による報告・討議」を2020年9月に開催して、古典芸能全般にわたる広汎な調査・報告を継続している。また、同年に武蔵野大学能楽資料センター、楽劇学会、能楽学会などで開催されたzoomを用いたシンポジウムや報告が、各紀要に掲載されている。本年は、野上記念法政大学能楽研究所創立70周年記念HOSEIミュージアム特別展「危機と能楽－いかに受け止め乗り越えてきたか－」が開催された（2022年9月～2023年1月）。自然災害や戦争に直面した能楽界の対応を資料展示・シンポジウム・冊子を通して辿るなかで「コロナ禍と能楽」を取りあげる。9月刊行の冊子では、緊急事態宣言前後の動向を略述し、能楽師たちのなまの声やオンライン活動を具体的に紹介する。上記の諸記録から伝わってくるのは、危機に直面した能楽師たちの工夫と努力、結束と協力である。その姿を通して、作り手と受け手の新たなつながり、たとえばオンライン配信やクラウドファンディングなどが育まれつつあると感じた。

●各種受賞

日本芸術院新会員　狂言方和泉流　野村万作

重要無形文化財保持者（各個認定＝人間国宝）　シテ方宝生流　大坪喜美雄

文化功労者　狂言方大蔵流　山本東次郎

第43回松尾芸能賞大賞　狂言方和泉流　野村萬斎

おだ・さちこ

能・狂言研究家。博士（文学）。法政大学大学院修了。主要研究テーマは、能・狂言の演出史研究と作品研究。演劇批評、講演、解説、復曲・古演出上演のドラマトゥルクなど、研究と舞台をつなぐ活動にも取り組んでいる。